

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数指定がある問いでは、句読点・記号なども一字として数えます)

① みなさんはなぜ生きものの名前をおぼえたのですか。その名前は、どこで、誰に習ったのか、覚えていますか。珍しい生きものの名前なら、どこでどうして覚えたのか、思い出すこともあるでしょう。しかし、身近なありふれた生きものの名前はどのようなか。私は、源五郎や目高や蟬や燕の名前を誰から教えてもらったのか、まったく覚えていません。たぶん小さい頃に家族や近所の人から習ったのでしょう。

では、家族や近所の人にはなぜ子どもに教えるのでしょうか。

(1) 子どもが「②」と尋ねるからです。では、なぜ子どもは名前を知りたがるのでしょうか。名前を呼ぶ(名づける)ことによって、その生きものと同じ世界に生きているということを実感できるからです。「③」と言うことによって、かぶと虫の姿とそれがいる森の世界が生き生きと目に浮かびます。仲間とかぶと虫と森とを共有できます。また、人にもその世界やかぶと虫捕りのことを伝えることができます。

(2) 家族や近所の人、子どもに名前を教えたいからです。自分もそうやって教えられてきて、よかったと思っているからです。名前を教えるということは、その生きものとのつきあいまで教えることになります。「④

「⑤」というわけです。ところが、幼い子どもから「ヘラクレスオオカブトって知ってる」と聞かれると、たじろぐしかありません。そういう虫がすんでいる世界を私は知らないからです。もちろん子どもは絵本や図鑑で覚えたのです。名前を知っている分、これらの生きものが生きている熱帯雨林の世界については、私よりも「経験」が深いのです。しかし、その世界は身近な所にはありません。どういう生きものの名前を知っているか、はその人が関心を持っている世界を表現しているのです。

私は、⑥ 名前は二度名づけるものだと思います。最初は初めて会った時です。もちろん名前はわかりません。そこで「何と

「いう名前なんだろう」と感じ、何か名前をつけて呼びたいと思ったらしいです。その姿を覚えておこうと思っているからです。じつはここで無意識に名づけているのです。その姿を覚えておこうとすることが、名づけることの始まりです。「白くて、小さくて、よく上下に動きながら飛んでいる蝶」と名づけているようなものです。

やがて、母親から「あれは紋白蝶だよ」と教えられたときに、二度目の名付けが行われるのです。このように自分の世界では、最初に出会った時から名前を知っていることはありません。そして名前を覚えたい、呼びたいと思う生きものの名前を選択して、覚えていくことによって、自分の世界が広がって、深くなっていくのです。

※ひやくしやう
かつての百姓は生きものの名前を四〇〇種から六〇〇種ぐらい知っていました。しかも、よく知っているだけでなく、実際に名前を呼んで（使って）きました。それは図鑑で覚えた名前ではなく、「君は何という名前なんだ」と尋ねて、家族や近所の人たちから習ってきたものです。名前を知っているということは、その生きものへの情愛（場合によっては反発）が深いということです。

⑨ という実感があるということです。

ところが現在の福岡県の百姓へのアンケート調査では、生きものの名前を知っているのは平均すると二五〇種あまりです。今の年齢で言うと、九〇歳以上の百姓に比べると、生きものの名前を三分の一しか知らないのです。これはどうしてでしょうか。生きものと一緒に生きている世界が狭くなってしまったのです。もちろん昔に比べれば、活動範囲は広がったでしょう。でも、生きものと目を合わせてつきあう時間が減ってしまったことが原因です。

五〇年前は田んぼで働く時間は、10アール（1000㎡・一〇人分の米がとれる広さ）当たり一一八時間でした。二〇一七年では二八時間です。もちろんそれだけ機械化され、効率化され、生産性が向上したのですが、生きものへまなざしを向ける時間も減ってしまったのです。これは農業にとって、よくないことだと私は思っています。農業が自然を守るためには、^⑪これほどでもまずいことです。

若い頃は田んぼのあぜ草の名前なんてあまり知りませんでした。その頃の私のあぜ草刈りの気分は、「ああ暑い。早く刈ってしまおう」というようなものでした。やがて、草の名前を覚え始めたら、草がよく見えるようになってきたのです。「まだ秋なのにもう春の草のあざみが咲いているな」「蔓籐は一年に三月と九月の二回も葉が出る変な草だ」「田んぼの入り口から、なかなか中の方に入って来られないのが小待宵草だ」というようなつきあいができくるのです。

こうなると、草刈りしていても、草たちと話をするようになるのです。「もう花が咲いたのか。早過ぎはしないか」「今度はあまり伸びていないから、君たちは刈らないよ」「今年もやっぱり会えたね」と、口には出しませんが、心の中で会話しながら、草刈りをするようになります。こうなると草刈りが苦にならなくなったのです。草刈りという仕事に没頭できるようになったのです。草刈りが楽しくなったのです。草刈りによって、自然の中に入っていけるようになったのです。

若い頃の私は、何人もの年寄りの百姓から「稲の音が聞こえるようになってくれないと」前ではない」と教えられ、まったく理解できませんでした。

百姓になって三年の夏のことです。夜中になって、急に土砂降りの大雨になり、家の横の小川の濁流の音で目が覚めました。「そうだ。田んぼの水口を閉めていなかった」と気づき、あわててレインコートを着て、田んぼに出かけようと思いました。妻が「足を濡らせて、川に流されたらどうするのよ」と止めようとします。しかし、田んぼが、稲が呼んでいると感じたのです。⑮たしかに非常事態の中では、異常に興奮していますから、そう感じるものであって、平常はそこまで稲の声に耳を傾けることはありません。

私にはまだ稲の音が聞こえるわけではありませんが、稲の気持ちがわかるような気がするのです。若い頃こういう心理を「非科学的だ」と思っていたのは、相手の作物から距離を置いて、冷静に、客観的に、科学的に観察する方が、稲のことはよくわかるという教育を受けていたからです。いくら「相手の気持ちになれ」と言われても、それは人間の関係の中だけのものと、思っ

ていたからです。これが科学という外からのまなざしの影響^{えいきやう}でした。

ところがこれまで話してきたように、生きものにしっかりとまなざしを向けるようになると、人間も同じ生きもの同士だという感覚が生まれてくるものです。そうすると、自然にまなざしが引き寄せられるような感覚になり、相手が何を訴^{うった}えているのが、少しずつわかって来るような気がするのです。科学的な分析^{ぶんせき}も重要ですが、それよりも相手が何を伝えようとしているのか、相手の身になって感じることはもっと大切ではないでしょうか。これが内からのまなざしのすごさです。

生きものに（場合によっては物に）生を感じて、会話しようとする習性は、本来人間に備わった能力だと言われています。これは「心理学」の数々の実験で確かめられていますが、べつに実験で確かめるまでもなく、私たち百姓は草や虫と普段に話をしています。

⑱

相手が苦しそうな表情を浮かべていたら、相手の苦しみを読み取るから、同情し、手助けをしようと思うのです。この

力こそ、人間が身につけた能力の中でもすごいものではないでしょうか。

⑲

人間の社会もできあがり、社会生活もうま

⑳

くいくようになったのです。この能力は、人間以外の生きものにも簡単に適用できるのです。うっかり蛙^{カエル}を踏んづ

けたら、私は即座に「ごめん」と言います。蛙に人間の言葉がわかるはずはありませんが、私は蛙に向かって謝^{あやま}っているのです。これはどうしてでしょうか。

私たちは、生きものの心をつかもうとする習慣を身につけているのです。それは、自分の経験を引っ張り出してきて、当てはめることです。そうやって、私たちの先祖はまだ科学がない頃から、生きてきました。私のこのような語り方は「擬人法^{ぎじんほう}」と呼ばれています。生きものの気持ちを語る時には、私は人間の言語しか使えませんから、人間の言葉に置き換^かえて語るしかありません。これは、なかなかの知恵^{ちえ}だったのではないのでしょうか。

こういうこともありました。田植えの後しばらくは、稲の葉が繁^{しげ}っていないので、田んぼの水は直射日光をまともに浴びて、

まるで風呂^{ふろ}に入っているような熱さになります。

沼蛙^{ヌマガエル}

蛙はこの熱さにも平気ですが、土蛙や雨蛙や殿様蛙^{トノサマガエル}のお玉杓子^{オクマジヤクシ}はそう

はいきません。水面下の田んぼの中につけた私の足跡^{あしあと}の底に集まっています。どうやら足跡の底の方が水温が低いことに気づいたようです。

㉑

避暑地^{ひしよち}なのです。私はそれを見て、お玉杓子に「どうだ、足跡をちゃんとつけておいたオレは偉^{えら}いだろう」と少し

自慢^{じまん}したくなります。お玉杓子も喜んでいような気がするのです。しかし、この気持ちを誰かに語るならば「擬人法」になります。

しかし、自然とつきあううちに、このような経験^{けんけん}というか感覚^{かんかく}というか、生きものと

㉒

できる能力が身につくように

なるのです。こういう精神世界^{しんせいせかい}を抜きに自然は語れるはずがない、と私は思います。

（宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』による ただし、一部表記を改めたところがある）

※「百姓」という言葉について、筆者は、「決して差別語ではなく、江戸時代から誇^{ほこ}り高い呼称^{こしょう}でした」と記している。

問一、——線①「みなさんはなぜ生きものの名前をおぼえたのですか」とありますが、「名前」を知っているということについて説明した次の文の [] に当てはまる言葉を、本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

名前を知っているということは、その名前を持つ生きものの世界に [] ということである。

問二、 [] ② [] ④ に当てはまる言葉を、次のア～ウの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回使うことはできません。

ア、またかぶと虫を捕りに行こう

イ、この生きものの名前は何と言うの

ウ、かぶと虫は、あそこの森にいつばいいよ。くぬぎの木にね

問三、——線⑤「たじろぐ」と同様の意味を持つ言葉を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、驚く おどろ イ、ひるむ ウ、とぼける エ、あわてる

問四、——線⑥「名前は二度名づけるものだと思っています。最初は初めて会った時です」とありますが、「初めて会った時」に「名づける」理由を、本文中から抜き出して答えなさい。

問五、——線⑦「しめたもの」とありますが、「しめた」に近い気持ちを表す熟語を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、歓喜 かんき イ、残念 ウ、愛着 エ、後悔 こうかい

問六、——線⑧「名前を覚えたい、呼びたいと思う生きものの名前を選択して、覚えていくこと」を、筆者は何と表現していますか。本文中から二字熟語で抜き出して答えなさい。

問七、 [] ⑨ に当てはまる言葉を、本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問八、——線⑩「活動範囲は広がった」とありますが、「活動範囲」が「広がった」理由を、本文中の言葉を用いて答えなさい。

問九、——線⑪「これはとてもまずいことです」とありますが、どのようなことが「まずいこと」だと述べていますか。本文中から三十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問十、——線⑫「草の名前を覚え始めたら、草がよく見えるようになってきた」とありますが、「草の名前を覚え」ることによって、結局どのようなことができるようになったと述べていますか。本文中の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問十一、——線⑬「没頭」の意味を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、積極的に取り組むこと イ、他人の言いなりになること

ウ、必要なことだけを考えること エ、何もかも忘れて打ち込むこと

問十二、——線⑭「【前】が「専門家として通用する技能を備えていること」という意味になるように、【 】に当てはまる言葉を漢字で答えなさい。

問十三、——線⑮「たしかに」が直接かかっている部分を、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、非常事態の中では イ、興奮していますから ウ、そう感じるのであって

エ、耳を傾けることは オ、ありません

問十四、——線⑯「稲の気持ちがわかるような気がする」とありますが、こうなるために必要なことを、「……こと。」に続くように本文中から二十五字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問十五、——線⑰「外からのまなざし」とはどのような「まなざし」ですか。「……というまなざし。」に続くように本文中から三十五字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問十六、——線⑱「内からのまなざしのすごさ」が具体的に表現されている二十五字以内の一文を、本文中から抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問十七、
⑲ ・ ⑳ ・ ㉑
に当てはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、だから イ、たとえば ウ、ところが エ、そもそも オ、あるいは

問十八、——線㉒「避暑地なのです」とありますが、何のことを「避暑地」と表現していますか。本文中から抜き出して答えなさい。

問十九、——線㉓「この気持ちを誰かに語るならば『擬人法』になります」とありますが、ここで筆者は、どういうことを「擬人法」と述べていますか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問二十、
㉔
に当てはまる二字熟語を、本文中から抜き出して答えなさい。

問二十一、次の二文は本文中から抜いたものですが、どこに入れるのが適切ですか。その直前の十字を答えなさい。

科学的に考えれば、稲が声を出すはありません。これは非科学的で、無知な、古くさい教えだったのでしょうか。

二、次の①～⑤の にはそれぞれ共通する言葉が入ります。その言葉をひらがなで答えなさい。

- | | | |
|-------------------------------|-----------------------------|------------------------------|
| ① 悪態を <input type="text"/> 。 | 意表を <input type="text"/> 。 | 核心を <input type="text"/> 。 |
| ② 招集を <input type="text"/> 。 | 手間を <input type="text"/> 。 | 磨きを <input type="text"/> 。 |
| ③ 権力を <input type="text"/> 。 | 弁舌を <input type="text"/> 。 | 猛威を <input type="text"/> 。 |
| ④ 大台に <input type="text"/> 。 | 軌道に <input type="text"/> 。 | 手に <input type="text"/> 。 |
| ⑤ 大目玉を <input type="text"/> 。 | 足止めを <input type="text"/> 。 | 肩すかしを <input type="text"/> 。 |

三、次の①～⑤の——線をつけた言葉と同様の意味を持つ熟語を、後のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 心の琴線きんせんに触れる言葉ふ。
- ② 誕生日の豪華しょうかな夕食に目を見張る。
- ③ その事件に関しては、一切口をつぐむ。
- ④ 自分の店が一番良いと手前てまへそを並べる。
- ⑤ お世辞ばかり使って鼻持ちはなもちならない男だ。

ア、沈黙ちんもく イ、仰天ぎょうてん ウ、感銘かんめい エ、不愉快ふゆかい オ、自画自賛

四、次の①～⑩の――線をつけたカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- | | | | |
|---|--|---|---|
| ① | 環境 <small>かんきよう</small> のホゴを訴える。 | ② | 細胞 <small>さいぼう</small> のコウゾウを学ぶ。 |
| ③ | コンザツする前に帰ろう。 | ④ | 大きなカンバン <small>かんぱん</small> を掲 <small>か</small> げる。 |
| ⑤ | コクモツの自給率 <small>じきつりつ</small> が下がる。 | ⑥ | キシヨウ <small>キシヨウ</small> な価値 <small>かち</small> を持つ。 |
| ⑦ | テンシユカクを再建する。 | ⑧ | 巻頭 <small>まいてう</small> のさし絵 <small>え</small> が美しい。 |
| ⑨ | 根幹 <small>こんかん</small> を揺 <small>ゆ</small> るがす問題だ。 | ⑩ | 系統 <small>けいとう</small> を立てて勉強する。 |



問

問

問四

問五

問八

問九

問十

問十二

問十五

問十六

問十八

問十九

問
二
十

四

 γ_j

⑥	①	①	
⑦	②	②	
⑧	③	③	
⑨	④	④	
⑩	⑤	⑤	

受験番号	
氏 名	